

目黒信用金庫理事長賞

時代の中で求められる税の形

目黒区立目黒西中学校 三年

中嶋 早菜

今まで、税について学ぶ機会が学校や街のポスターなどでたくさんありました。あまり意識したことがなかったけれど、私たちの生活を確かに支える基盤になっているのが税だと学びました。そして、無意識のうちに税は生活に必要なものだから、減らせないものなのだ、という私なりの解釈をしていました。

そして現在、物価高の世の中になり、その対策として消費税減税や廃止を耳にするようになりました。実際に私の周りでもそのような意見を多く聞きます。しかし、私にはずっと大きな疑問がありました。税は必要だからあるのでは、なくなっても大丈夫なのか、と。それが最近、家族と見ていたテレビ番組に日本の年表が出てきたことで、消費税が導入されたのが一九八九年と知ったのです。それ以前に消費税のような役割を果たしたものがあつたかはわかりませんが、少なくともそれまで今の「消費税」はなかったことを知って驚きました。「税は歴史の中で、その形を何度か変えてきました。それは社会の変化によって、求められる税のあり方も変わったからです。」税の歴史についてインターネットで調べていた時、国税庁のホームページでこの一文を見かけまし

た。社会が物価高や、その他色々な変化を経て、求められる税の形が変わったのかもしれない、という気づきがありました。

日本の長い歴史の中での税の変化は著しく、初めは租・庸・調という収穫や労働、布、特産物を納めるものでした。その後、年貢米を税として納めるといふ社会が始まります。商工業が発達すると、税の種類が増え、さらに、納められる税がお金で統一されていきます。こうして比べると、社会の仕組みがより複雑になるにつれて、税の形が直接的に社会を回すものから間接的に使われるものに変わっていくことを感じました。このように、現在も税の形が変わる可能性があるのでは、と思ったのです。

社会の変化に合わせて導入された税の一つに、富士山の入山料があります。富士山は二〇一三年に世界遺産に登録され、それ以来コロナ禍がありながら、世界中の多くの人に訪ねられています。多くの登山客が来る中、富士山の環境を保全し、登山客の安全対策を運営するための入山料を登山客全員から徴収するため、税金として義務化されたのです。また、登山者数を制限し、過度な混雑を緩和することも期待されています。比較的簡単に旅ができるようになった今の世の中だからこそ、このような税がつくられたのかもしれない。

徴収されている税の一つ一つには、それぞれ意味があります。負担があることは大変かもしれませんが、むやみに否定せずに、その意義をちゃんと理解したうえで、今の自分ができる範囲で納税の義務を果たしていきたいです。